

るが、そのような議論は何らかの結論を導き出して満足するというよりはむしろ、精神を刺激し鍛練するという役割を果たす。女王の選択にも拘わらず、劇の結末の歌で、狩人の神が勝利の表象として、羊飼の神が敗北の表象として持ち出されているということで、シドニーが狩人テリオンの人生を、つまり行動を主体として瞑想をいくらか組み合わせた人生を理想の人生として称揚していることが示唆される。シドニーは『アーケイディア』の中で、ムシドロス王子に「そのような瞑想の人生は、怠惰の輝かしい称号に過ぎない」と言わせているが、1578年もしくは1579年という早い時期においてさえ、自らの理想の人生は女王のそれとは異なるということを、恐らく彼は察知していたのだ。しかしながら、シドニーはエリザベス女王が体現する君主の理想には深い忠誠心を覚えていた。それゆえにエリザベス女王その人に対してというよりはむしろ、この君主の理想像に対して、『五月祭の佳人』という劇は貢物として捧げられたのである。

とはいえ、叙情性と喜劇性を備えたこの優美な牧歌劇は、引き締まった簡潔な構造と登場人物たちの対話の妙に恵まれている。シドニーが劇作においてもひとかどの才能に恵まれていたことの証しであると思われる。

〔本稿は、平成13年度基盤研究（C）による研究報告の一部である。〕

## 【解 説】

サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney 1554-1586) 作『五月祭の佳人』(*The Lady of May*) は、1578年か1579年の5月にエリザベス一世女王が当時の半ば公然の恋人レスター伯爵の Wanstead の田舎屋敷を公式訪問した際に、女王歓迎式典の催し物として書かれた。リングラー [*The Poems of Sir Philip Sidney*, p.362] は、例えば『オールド・アーケイディア』に登場するドルカスやラロスのような人物名の一致からして、早い方の年代を主張するが、女王は1579年5月1日、五月祭の佳人が選出される日に実際にウォンステッド屋敷を訪問しているので、後者の可能性も残されている。しかし、作品の中には、創作年代に拘わる内的な証拠が見られないので、何れとも決定を見ないでいる。

この一幕物小劇はシドニーが物した唯一の劇作品である。宮廷仮面劇という文学形式との関連でしばしば取り扱われるが、言葉の厳密な意味では仮面劇とは言えなくて、宮廷歓待娯楽劇、もしくは〈偶然の出来事〉、〈ある出来事の記録〉と評すべき代物である。この劇の上演には「書き割りも大工仕事」も一切必要ではなかった。劇の趣向について言えば、例えば、詩人・劇作家 George Peele (?1557-96) の、ギリシャ神話に材を取り、Paris の黄金の林檎をエリザベス女王に捧げさせる *The Arraignment of Paris* (1594) や次のジェイムス一世治下の宮廷で演じられた Ben Jonson (1572-1637) その他の劇作家たちの宮廷仮面劇と同様に、芝居の劇的な大団円を臨席の国王に委ねるという手法において共通している。これらの宮廷仮面劇とは異なり、しかし女王臨席の許で女王歓待の余興として演じられた数多くの演芸と似ているのは、シドニーの劇が女王に劇中への積極的参加を与えていること、つまり劇の幕切れにおいて、〈五月祭の佳人〉への二人の求愛者のうち、どちらが佳人の愛を受けるに値するかについての判断は、実際に劇に登場する女王に委ねられていることだ。作者はいずれの選択も有り得るように描いているが、女王は穏健な羊飼エスピロスを受け入れ、その恋敵で豪放な獵師テリオンを退ける。この判断は臨席した貴顕紳士諸公には期待されるものではなかった。なぜなら、ここには哲学的論及があるのみならず、政治的宗教的意味が隠されているからである。

女王が瞑想的なエスピロスを選択したこと、つまり「大した奉仕をしてくれるがいくらか難のある人」よりは「長所は少ないが害がない人」を選択するのは、女王の政治的社会的態度として極めて特徴的なので、シドニーとレスター伯爵は共にその選択の可能性を必ずや予見したに違いない。羊飼と狩人の人生、即ち〈瞑想の人生〉と〈行動の人生〉との対立は、中世以来の文学的伝統であ

- (72)原文のラテン語は“omnium dierum ... pater noster ... semper”である。ここの箇所は恐らく、「主の祈り」の中で、「父と子と精霊とエリザベスの御名において」とロバートが締めくくったというのか、あるいは、「アヴェ・マリア」ではなくてエリザベスへの祈りの言葉を代用したというのかのどちらかであろう。
- (73)「九百条」というのは、引用の圧倒的重みを増すために恣意的に創作された条項であろう。
- (74)原文のラテン語は“tibi dominorum domina”である。
- (75)原文のラテン語は“vale, vale, felissima, et me ut facias ama”である。
- (76)原文のラテン語は“iterum valeamus et plaudimus”である。

☆注解にあたっては、主として以下の書物を参照あるいは引用した。

- William A. Ringler Jr. ed., *The Poems of Sir Philip Sidney*. Oxford: Clarendon Press, 1962.
- Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten eds., *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*. Oxford: Clarendon Press, 1973.
- A. C. Hamilton, *Sir Philip Sidney: A Study of His Life and Works*. Cambridge University Press, 1977. [大塚・村里訳、『エリザベス朝宮廷文人サー・フィリップ・シドニー』、大阪教育図書、1998.]
- Katherine Duncan-Jones ed., *Sir Philip Sidney: A Critical Edition of The Major Works*. “The Oxford Authors”. Oxford University Press, 1989.
- Elizabeth Porges Watson ed., *Philip Sidney: Defence of Poesie, Astrophil and Stella and Other Writings*. J. M. Dent, 1997.
- オウィディウス（田中・前田訳）、『転身物語』、人文書院、1966.
- マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル（西田他訳）、『ギリシア・ローマ神話事典』、大修館書店、1988.

- (59) 羊飼の守護神。シドニーは『オールド・アーケイディア』で、ヘラクレスの愛人でリュディアの女王オムパレーをかどわかそうとの魂胆から、彼女のベッドに入ろうとして、間違っってヘラクレスのベッドに忍び込んだパーン神の挿話を利用している。また『ニュー・アーケイディア』では、盾の上の紋章として、女装したヘラクレス像をピュロクレス王子に与えている。
- (60) エリザベス女王その人を指す。
- (61) 同じく、エリザベス女王その人を指す。この箇所要点は、ネーデルランドにおける〈プロテスタント同盟〉に積極的に拘わろうとするレスター伯の野望を、女王が一旦押さえたということである。つまり、女王が穏健なエスピロスを選択したということは、カトリック国スペインとあからさまに事を構えることへの拒否の姿勢を裏書きしているように思われる。
- (62) これらの役者たちは、レスター伯お抱えの職業劇団の団員たちだったかもしれない。
- (63) ここで、一応の話はケリが付く。以下の話は、後に付加された部分であり、以上の牧歌的礼讃に女王への宮廷的崇敬を書き加えている。
- (64) 瑪瑙は一般的に彫刻が施してある。それが時には人間の形に作られる場合もある。例えば、シェイクスピア『ヘンリー四世第二部』1幕2場「おれはいままで、これっぽっちしかない瑪瑙玉を供にした覚えはない、といって、瑪瑙玉なら金か銀に象眼してやるところだが、おまえはそうはいかんぞ、いまに安金属に仕込んでもとの主人に突っ返してやる、高価な宝石だといってな」、あるいは『から騒ぎ』3幕1場「背が高いのはにおい槍、背が低いのはできそこないの瑪瑙細工、話をすればおっちょこちょいの風見の鶏、黙っていれば朴念仁の気の根っこ」（小田島訳）などを参照。
- (65) 原文のラテン語は“Videte ... perfidem perfide”である。
- (66) 原文のラテン語は“Juno, Venus, Pallas et profecto plus”である。これはパリスの審判への言及であるが、エリザベス女王がこれら三女神の美德を併せた以上の美德を兼備していることを示唆している。ハンプトン・コート宮殿所蔵のエリザベス女王の肖像画では、女王はこれら三女神と対峙して、自らに林檎を褒賞として提示している。
- (67) 屋敷の主人口バートは、女王を巧みに偶像化して、あたかも女王が聖母マリアにして三位一体の四番目の人であるかのごとく称揚する。
- (68) 原文のラテン語は“oves, boves et pecora campi”で、これはラテン語訳聖書「詩篇」8章8節に見られる。英語祈祷書では“All sheep and oxen: yea, and the beasts of the field”となっている。
- (69) 原文のラテン語は“O heu Aedipus Aecastor”である。これはセネカの『オイディプス』（1563年英語訳）かギヤスコインの『イオカスタ』のある台詞の叫び声に間違っって言及したもので、正しくは“Oedipus, Jocasta”とあるべきところ。
- (70) 原文のラテン語は“proba dominus doctor, proba inveni”である。
- (71) 原文のラテン語は“unum par papisticorum bedorus”である。

よう」とある。

- (49)『オールド・アーケイディア』第2巻、17番7-8行に“*What wool my sheep shall bear, while thus they live./ In you it is, you must the judgement give.*”「我が羊かく暮らしつ いかな羊毛を成さむ／其方が因ゆえ 其方が断を下しおかれむ」とある。
- (50)原文のラテン語は“*enthymeme a loco contingentibus*”. 修辞学において“*enthymeme*”は、「相反するものからの演繹統一」の意。
- (51)古代ペルシャの王で、前333年のイッソスの会戦でアレクサンドロス大王から壊滅的な敗北を喫した。ダレイオスは逃亡するが、彼の母と妻と二人の娘はアレクサンドロスの捕虜となる。アレクサンドロスは彼女たちを丁重かつ親切に扱ったことで名高い。東へ東へと追われたダレイオスは、前330年、自分の部下の刃にかかり殺害される。アレクサンドロスは、傷つき倒れ戦車の中で息絶えようとしているダレイオスを発見、ダレイオスは征服者に妻と娘たちの世話をしてくれたことに感謝の言葉を呟いて息絶えた。その遺骸にアレクサンドロスは、自らのマントを投げかけた。
- (52)論理学の用語で、三段論法における大前提、小前提、結論という筋道に則ってはいる。
- (53)原文のラテン語は“*et ecce homo blancatus quasi lilium*”で、何かからの引用であろうが突き止められない。底意は、ドルカスが狼狽のあまり真っ青になりかかっているということであろう。
- (54)エリザベス女王のことを暗示しているが、女王の多くの求愛者たちの徒なる望み、とりわけ、レスター伯のそれへの言及であろう。
- (55)ところで、スペンサー『アモレットィ／恋愛小曲集』67番9-14行には、「鹿は、前より柔和な眼で私を見つめながら／逃げようともせず、恐れもせず、佇んでいる／私は、半ば震えている鹿を捕らえ／同意を得て、しっかりと縛った／思うだに不思議なことだ、あれほど手に負えなかった獣が／自らの気持に欺かれてか、おとなしく虜となったのだから」(大塚他訳)とあるのを参照。
- (56)原文のラテン語は“*Bene, bene, nunc de questione propositus*”である。
- (57)この箇所は、当該作品のテーマにかかわる大事な所である。つまり、五月祭の佳人は、自分の夫としてエスピロスとテリオンのどちらがより相応しいかを女王に裁断してもらうのみならず、自らを判断してもらい、かつまた羊飼と狩人のどちらがより分があるのかを裁定してもらおうとしているのである。
- (58)狩人の守護神。George Gascoigne (c.1525-77. 英国の詩人。悲劇 *Jocasta* [1566] は翻案として英国の舞台にかけられた最初のギリシャ悲劇。Ariosto の翻案喜劇 *The Supposes* [1566] は英国最初の散文劇。*The Posies of George Gascoigne* [1575] は最も古い詩論を収めている。英国ルネサンスの先駆者) が1575年に開催されたレスター伯主宰のケニルワース城での女王歓待の場では、シルウァーヌス役を務めたとされる。

音立て、深きは物言わぬ」などがある。

- (34) テリオンは中世の詩に頻出する、巧みに逃げを打ち捕まえにくい貴婦人を鹿に譬えるという古い技法を用いているが、これはペトラルカの詩からそれを英語に移植したワイアットの詩まで、シドニーにはお馴染みのテーマであった。
- (35) これはテリオン自身のことを指している。
- (36) ここで当の問題は、五月祭の佳人の結婚相手から、羊飼と狩人のどちらの方がより尊敬に値する職業かということにすり替わっている。
- (37) 「羚羊」即ち「穏やか」の意。
- (38) 「喧嘩（早い）」の意。
- (39) これはよく考えてみると皮肉な賛辞になっている。なぜなら、町中の鐘という鐘を一斉に鳴らせば、必ずや不協和音を奏でるに違いないからである。
- (40) 今でも農夫たちには知られている肝臓の病気。乙女と羊の同一視は、先のテリオンによる乙女と鹿との同一視と平行関係になっている。
- (41) ミダスはフリュギアの王。音楽の腕比べでアポロンではなくパーンに軍配を上げたミダスの粗末な裁定に腹を立てたアポロンは、ミダスの耳を驢馬の耳に変えてしまった。この箇所の意味は、ミダス王の驢馬の耳が老いぼれのたわごとを聞くのにふさわしいということ。
- (42) これもまたシドニー創作の誓言であろうが、その骨が狩人の骨なのか、獲物の骨なのか、曖昧である。
- (43) 原文は“blaying”であるが、異本には“bleaying”、“bleinge”とある。しかし、辞書の裏付けは“blaying”のみ。『アストロフィルとステラ』第9の歌46-50行に、  
“Then adieu, dear flock, adieu:/ But alas, if in your straying / Heavenly Stella meet with you,/ Tell her, in your piteous blaying,/ Her poor slave's unjust decaying.”  
「さらば、羊たちよ、去らば。／ああ、だが、おまえたちがさまよう間に／神々しいステラに出会ったら／その悲しげな鳴き声で、伝えておくれ／彼女の哀れな僕が、不当にも滅びつつあると」（大塚他訳）とある。
- (44) 原文のラテン語は“Heu, Ehem, Hei, Insuper, Insuper vulgorum et populorum”で、この駄弁の背後にはラテン語の陳腐な決まり文句があると思われるが、突き止められない。
- (45) 原文のラテン語は“corpusculum”で、これはロンバスを演じた役者の小柄な体躯を冗談交じりに指しているのかもしれない。
- (46) 原文のラテン語は“prius dividendum oratio antequam definiendum, exemplum gratia”であるが、“exemplum”は“exempli”の誤り。
- (47) 原文は“templer”で、“one who contemplates”の意味であるが、またこれは“knight templar”として「宗教的情熱」とか、“barrister, or inhabitant of the Inner Temple”として「刻苦精励」を意味する。
- (48) 『オールド・アーケイディア』第4牧歌、71番73行に“These mountains witness shall, so shall these valleys”「これらの山々を証人とし、これらの谷間を証人とし

- (20) 原文のラテン語は “Haec olim memonasse iuvebit” . Virgil, *Aeneid*, I. 203 では、  
“forsan et haec olim meminisse iuvabit=one day we shall enjoy the recollection of  
these things” となっている。
- (21) 原文のラテン語は “ad propositos reverteto” である。
- (22) 原文のラテン語は “Pulchra puella profecto” である。
- (23) アトラスの七人の娘でゼウスによって星に変えられたプレイアデス（昴座）の長女。  
ゼウスとの間にヘルメスを生んだ。昴座が天に昇る五月の月は、マイアの名前から  
取られた。
- (24) 原文の “a cast” は鷹狩りの専門用語で、一度に一定の数の〔二羽の〕鷹を空に放  
つ時に使われる言葉。
- (25) 原文のラテン語は、 “O Tempori, O Moribus” であるが、これは Cicero, *Contra  
Catilinam*, I. i の “O tempora, o mores” を誤り伝えたものである。
- (26) ウォンステッド荘園の当主で、エリザベス女王歓迎式典の最高責任者、レスター伯  
ロバート・ダドリのこと。
- (27) 「野生の獣」の意。
- (28) 「フェルト・プレッサー」の意で、そこから「羊毛を扱う者」。
- (29) この一節で、乙女は五月祭の佳人に選ばれた経緯と、狩人テリオンか羊飼エスピロ  
スカ、その何れかを夫として添い遂げる意図で、二人の特徴を手短に説明している。
- (30) 二人の求愛者のうちどちらを選ぶべきか、女王に審判を迫ろうとしている。
- (31) ここに見られる歌競べの競技は、ギリシャ・ラテンの牧歌詩にはしばしば繰り返  
し現れる技法であり、ルネサンス時代に様々な詩人によって復活させられた。しかし、  
この歌は英語で書かれた最初期の一例である。時期的に近いものとしては『オール  
ド・アーケイディア』第一牧歌、第二牧歌に出る歌、スペンサー『羊飼の暦歌』八  
月の歌などがある。
- (32) 詩、歌、その他の諸芸術の創造における靈感の女神たちで、アポロンに付き従う。  
ユピテルとティタン神族の記憶の女神ムネモシユネが九夜引き続き交わって生まれ  
た娘たちであるが、本来は、靈感を与える力のある泉を支配するニンフたちである。  
その種の泉の主なものに、ヘリコン山のアガニッペとヒッポクレネ、パルナッソス  
山のカスタリアの泉がある。9人の女神と主な権能は以下のとおり。クレイオ＝歴  
史の女神。エウテルペ＝音楽と叙情詩の女神。タレイア＝喜劇、田園詩の女神。メ  
ルポメネ＝悲劇の女神。テルプシコレ＝踊りと歌の女神。エラト＝叙情詩と恋愛詩  
の女神。ウラニア＝天文学の女神。カリオペ＝叙事詩の女神。ポリュヒュムニア＝  
英雄讃歌の女神。
- (33) Tilley, *Proverbs* の初例は1618年。類例としては『オールド・アーケイディア』第  
一牧歌7歌11行目 “Shallow brookes murmure most, deep silent slide away” 「浅い  
小川はせわしく音を立てる、深い川はゆったりと静かに流れる」とか、ウォール  
ター・ローレーの “Our passions are most like to Floods and streames;/The shallow  
Murmure;but the Deep are Dumb.” 「我らが情熱は大河と小川に似ている／浅きは

- (13) 原文は“loquence”で、“eloquence”の別形。「修辭的技法」ではなくむしろ「饒舌多弁」の意。ラテン語の“loquentia”は「弁舌爽やか、用意周到」の意。
- (14) 原文は“bashless”で、この逆説的な形容辞は、ロンバスが「はにかみ屋」でないのに「はにかみ屋」であるべきということを含意し、ラロスにしてみれば、侮辱を賛辞として隠蔽する意図が微かに読み取れる。
- (15) ロンバス教師の文体は、当時流行のギリシャ語ラテン語からの難解な借用語を利用する〈術学的用語〉の悪しき戯画化である。これら〈術学的用語〉は学者ぶった大言壮語的な意図を満たすため、英語に移入された。スペンサー『羊飼の暦歌』(1579年)への序論的書簡で、E.K.は次のようにこの傾向を正面攻撃している。「私の意見では、詩人が当然受けるべきあまたの称賛の中で、立派な本来の英語を、いわば正当な相続財産として復活させようと努めたことこそ、特別な称賛に値するものである。このような言葉は、長い間使われず、ほとんど完全に相続の資格を奪われ、これこそが私たちの母国語が本来散文にも十分に役立ち、韻文でも堂々としているのに、両方の分野で長いこと空虚で不毛と考えられて来たただ一つの理由なのである。この欠陥を補い、繕おうと努めた人もいるが、そういう人は、ここはフランス語、あそこはイタリア語、そして至るところにラテン語を借りて来て、他国の言葉のぼろの継ぎ接ぎで穴をふさぐことになり、こういった他国語が、お互いにいかに不調和なものか、いやそれより、私たちの国語とはさらに合わないことを量りもしなかったのだ、だから、この人たちのお蔭で、私たちの国語は、今では他の国の言葉の寄せ集め、ごった煮になってしまっている。」
- (16) 原文は“transfund his dotes”で、ラテン語の“transfundere”と“dos”=“pour out his gifts”から来ている。しかしここには、“transform his darts”の意味が内在していて、女王の畏れ多い美の破壊的力を暗示している。
- (17) Virgil, *Aeneid*, VI. 853, “parcere subjectis et debellare superbos = to spare the humble and cast down the proud.” から。シドニーは、ネーデルランドのアルバ公の後継者 Requesens について書かれた、ランゲから自分宛の1573年12月21日付の書簡において、この言葉の皮肉な使い方を覚えたのかもしれない。「彼は彼の知恵の目覚ましき一例をまさに見せてくれた、なぜなら、彼の旗印のために、奢レル者ヲ挫クベシ、を標語として採用したのだから。」
- (18) 原文のラテン語は、“Dixi. Verbus sapiento satum est.” Morris Palmer Tilley, *A Dictionary of Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* には、“A word to a wise man is enough” が1546年初例として掲載されている。
- (19) 美神ウェヌスとトロイア王族の一人アンキセスとの息子。トロイアに近いイダ山中で生まれ、ニンフに育てられた。ギリシャ軍によるトロイアの滅亡後、父を背負い、一群の仲間と共に海へと逃れた。一同は様々な苦難の冒険の末にイタリアのラティウムに定住し、ローマ人たちの伝説上の祖先となる。アエネアスの物語はウェルギリウス『アエネーイス』に語られ、全編を通じて、彼は運命に翻弄されるが、究極的には神々の王ユピテルに守られている。



- 音節“count”には“cunt”との言葉遊びがある。例えば、劇中劇の直前でハムレットがオフィーリアを茶化す台詞「はしたないことでもすると思ったのか」(小田島訳) “Do you think I meant country matters?” (*Hamlet* 3.2.115)、あるいは、ジョン・ダン“The Good-morrow”の3行目「他愛なく鄙の玩具にじゃれついていたというわけか」(河村訳) “But suck'd on country pleasures, childishly?”などを参照。
- (5)「支持者たち」の役割は、恋敵たちがいざ決闘ということになれば、その際に何らかの形で助太刀をすることである。
- (6)原文の“infectious”は「感染性の、伝染病の、汚染する」の意味であるが、これは恐らく“destructive”の滑稽な誤用であろう。因習によれば、女王の美はそれを見る者を当惑させ、魅惑し、あるいは盲にさえるからである。
- (7)〈嘆願書〉とは言いながら、これはほとんど前口上のな挨拶状に過ぎない内容である。嘆願の実質的な事柄は、既に女性嘆願者の台詞の中に明らかである。シドニーは数多くの宮廷(詩)人とは違い、女王への阿諛追従を主たる筆の仕事としなかった。この歌はほとんど唯一のシドニーによるエリザベス女王賛歌であり、二組の三要素、即ち、〈地位、温顔、心映え〉〈耳、眼、心〉から機械的に作られている。
- (8)「クルクル回る玩具の駒」あるいは「平目」の意で、四角四面の滑稽な人物。シェイクスピア『恋の苦勞の空回り』に出る学校教師ホロファニーズを先取りしたような人物で、街学的で自尊心が滅法強いが、実は無知蒙昧であり、無益と愚かさが同居した言動をする。フィールディングはこのように角があり街学的という考えを利用して、トム・ジョーンズの家庭教師の一人を“Square”と名付けた。
- (9)「お喋り」の意。『オールド・アーケイディア』第一牧歌に、この名前の付いた若い羊飼が登場し、第三牧歌では、ラロスとカラの結婚式が祝われる。恐らく、親子関係として想定されているのであろう。
- (10)原文は“featioust”で、恐らく“featous”から来ている。“i”を入れたのは、ラテン語の“facticius”に語形を近づけるためであろう。それにしても、シドニーは“-est”の付いた最上級の使用を好む傾向がある。例えば、“beautifullest”、“substantiallest”など。
- (11)これは恐らくシドニーが創作した誓いの言葉であろう。『ニュー・アーケイディア』にも喜劇的人物で羊飼番頭ダメタスが発する滑稽な誓いの言葉が見られる。例えば、「パラス女神の上履きにかけて」、「ディアーナ女神の櫛箱にかけて」など。
- (12)原文は“fransical”で、“frenzy”と“fancy”からの造語。シドニーは *Certain Sonnets* 30番で、これら二語に脚韻を踏ませている。“From so ungrateful fancy,/ From such a female franzy/ From them that use men thus:/ Good lord, deliver us.” 「そんな非情な懸想から／かくなる女々しい狂熱から／男をかく扱う者共から／どうか神様、我らをお救い下さい」。その上、“malady”との組み合わせからして、この語は“French malady”即ち「梅毒」を微かに示唆するが、それとく愛とを等価に結び付けるのは極めて皮肉的であるように見える。口の悪いラロスの言葉として辛辣味を帯びている。

り、ローマ法に従い、偉大なるトルコ皇帝ユスティニアヌス法典<sup>(73)</sup>の第七章第二節の九百条ですが、この御方はその点において全ての権利を放棄したことになり、その権利は、殿方ノ女主人、アナタ様<sup>(74)</sup>に没収されることになります。ゆえにお受け入れ下さい、国法ニ照ラシ、かくのごとく解放されて、この御方はそれを取り戻そうとするほど厚かましくはないはずです。

さて、ナンジスコヤカニ、コノウエナイサチアレカシ、ソシテコレマデイジョウニワタシヲアイシテクダサレ<sup>(75)</sup>。では、これにて、一件落着。拍手喝采ヲ、ソシテ御機嫌ヨロシユウ<sup>(76)</sup>。

☆文中のラテン語の箇所は、カタカナで表記した。

☆翻訳の底本には、Katherine Duncan-Jones ed. "The Lady of May", in ed. Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten, *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*. Oxford: Clarendon Press, 1973 を用いた。

## 【注 解】

- (1) ウォンステッド荘園は1577年にレスター伯がリッチ卿から購入し、大改修を加えられた。ウォンステッドの庭園は、後に同敷地内に瀟洒華麗な邸宅を新築したサー・リチャード・チャイルドに献呈された匿名の詩 *Flora Triumphans* (1712) で称揚された。ホレス・ウォルポールは旧ウォンステッド邸の中庭が現在ウェルベック修道院に保管されているエリザベス女王の肖像画に描かれていると主張した (Walpole, *Anecdotes of Painting* [1762], p.135)。この推測が当たっていれば、その肖像画は、ちょうど『五月祭の佳人』が書かれる切っ掛けになった女王の訪問の祝賀のために描かれたということになるが、これ以外に確かな証拠は見当たらない。
- (2) レスター伯はロンバス教師によって「正直な男」と評されている。もし『五月祭の佳人』が1579年に書かれたのであれば、この劇を借りて、レスター伯の新妻と彼女の連れ子で長女のペネロピ・デウヴリュ（後のリッチ夫人）を女王に紹介する手段として、シドニーが利用していた可能性がある。「らしき身なりの婦人」という言葉は、女性嘆願者の真の正体が、彼女の田舎びた服装が示唆する以上に高位にある者であることを暗示する。
- (3) 新しくレスター伯爵夫人と称せられた者は、女王取り巻きの貴顕紳士のこのような支持を大いに必要としたであろう。
- (4) 「婚礼」の別の意味は、“country matters” → physical love-making. country の第一

テリオン            悲しきかなわれ、悲しみのうちに膏藥を見いだす  
わが不正なる災い、麗しき精神から下されしゆえ<sup>(61)</sup>

梁の音が完全に止むと、五月祭の佳人は次のように暇乞いとした。

五月祭の佳人    御麗人様、と申しますのは、その他の称号は貴女様の栄光を増すどころか陰らせてしまいますので、そのようにお呼び致しますが、わたくしと仲間たち<sup>(62)</sup>はそろそろお暇を賜らなければなりません。貴女様の御威光に仇なすわれらの愚行をどうかよしなにお考えください、貴女様の寛大さはさらに大きな過ちさえ御赦免になられるほど懐深いものでありますゆえに。お幸せな夜の訪れを願いつつ、わたくしがいただきました〈五月祭の佳人〉の称号に従いまして、これまでそれは見事に役割を果たしましたが、これから後は五月の華麗な隆盛がいついつまでも貴女様の中に、そして貴女様と共にあらんことを御願い奉ります<sup>(63)</sup>。

そうして一同は、ロンバス教師を残して、立ち去った。ロンバス教師は女王陛下に数珠玉のごとき丸い瑪瑙<sup>(64)</sup>の鎖と奉納し、苛立ってこう言い始めた。

ロンバス教師    これら素性卑しき陰のごときものども、不誠実ニ事ヲ運ビシヲ御覧ジロ<sup>(65)</sup>。お前らはしこたま鞭を食らって当然だ、この麗らかな妖精殿下にきちんと暇乞いの言葉を述べる前に、わしの權威を蔑ろにしおって。まあ、イツカ別ノ時ニ、わしも報われることもあろう。

さて、貴女様、ユーノー、ヴェヌス、パラス、ソシテ確カニヨリ高キ価値<sup>(66)</sup>を併せた貴女様に、私の忠誠から生まれる流麗芳潤な果実をご披露申さねばなりません。カクナル仕儀ニテ、我らが町にとある隣人、ウォンステッドのロバート様<sup>(67)</sup>と言われる御方がお住まいです。正直な御方と目され、私たち下賤の者を命ニ代エテ愛して下さる御方です。小粒の屋敷に戻られると、スベテノ羊、牛、野ノ家畜<sup>(68)</sup>を人々に振る舞って下さいます。而して、実情はと申しまするに、教皇派の大罪にて、その御顔に忌まわしく泥を塗られておいでです、アア、悲シイカナ、オイディプスよ、イオカステよ<sup>(69)</sup>。そのヨキヒトは強大な公教徒で、それにより私の良心は豊かに養われますが、私にはその事を貴女様に包み隠すことが出来ませんでした。ゴ吟味下サイ、ゴ主人様、吟味ノウエゴ確証ヲ<sup>(70)</sup>。私は一対ノ教皇派ノ数珠<sup>(71)</sup>を発見しました。それを用いてこの御方は、マイニチ、数珠紐の数珠玉を一つ一つ弄りながら、テンニマシマスワレラガチチナルカミの後ツネニ<sup>(72)</sup>、エリザベスと続けられるのです。ソレユエニ、つま

にふさわしい御麗人様、どうかわたくしたちの耳に、これら両名のうちどちらがわたくしによりふさわしいか、あるいはわたくしが彼らにふさわしいかのご判断をして下さるという、そのような僥倖を、そしてわたくしには特別の御寵愛を賜りますように。そのうえ、あらかじめ申し上げますが、わたくしを裁かれるにあたって、貴女様のご判断はわたくし以上のものを裁かれることになるのです<sup>(57)</sup>。

このように催促されて、エスピロスこそが佳人にいつぞう値するという御判断が女王陛下の思召であった。しかし、いかなる言葉で、いかなる理由で女王陛下がそのように判断されたのか、下賤の者たちの名前を含むこの記録文書には掲げる価値がないものだ。ただ、こう言っておけば十分であろう、下された判決に基づいて、羊飼たたと狩人たとはコルネットとリコーダーとの合奏をし、エスピロスは、自らの歓びの大きさを称え、この上なく立派な恋敵にしてやられたがゆえに、相方の慰撫に気を遣い、次の歌を歌った。その歌は二つの短い話からなり、このような内容であった。

エスピロス シルウァーヌス<sup>(58)</sup>は長らく恋をし、長らく徒労のまま  
やっと欲望の矛先を手に入れるや  
訊ねられた、望みの幸運を手にした今  
これ以上何か欲しいものがあるかと  
「何も」と彼、「これに勝る歓びはない  
わが女神を、わが祝福の眼で見れるほどの」

テリオン 放恣なパーン神<sup>(59)</sup>が、獅子の革にたぶらかされ  
ベッドに来ると、接吻の代わりに傷を受けた  
悲痛と恥辱に塗れた彼は  
自らの運命を慰めるため、こうして耐えた  
「哀れなパーン」と彼、「殴られはしたが  
恥には及ばぬ、彼はヘラクレスだったから」

エスピロス 嬉しきかなわれ、選ばれし旋律を楽しむ  
そのような御方<sup>(60)</sup>がわが心の証人  
わが善を見抜きし澄み渡りしその眼を  
わが資質を裁きし馨しきその声を祝福する

たちに関するペルシャの王ダレイオスの詭弁<sup>(51)</sup>に過ぎぬ。言うなら、一人の男が一人の女と結ばれる、すると体は二つながら心は一つ。私の訓戒にただ耳を傾けられよ、さすればあなたはこの者の顔色をなからしめることが出来よう。この者に、彼の大前提は悪党、小前提は愚物、そして結論は愚かな悪党と告げられよ<sup>(52)</sup>。白百合ノゴトク顔面蒼白ナル男ガココニイル<sup>(53)</sup>。

リクソス 羊飼の生活にもいくらかは取り柄があると言ったのは、我らの生活と同様に、田舎の平穏をいくらかは借りているからだ。だが、話はそこで終わらない。なぜなら、我らの生活は、その平穏さにかてて加えて、雄々しい活動で体を鍛練させ、精神を高めてくれるからだ。おお、甘やかな満足よ、蝕まれることなき樹木の長き寿命を眼にすることは。何とスクスクと伸びて行き、それでも決して高からず、仲間の樹木の成長を邪魔することはない。意地悪に曲がって育つ樹木のみが邪険に迷惑をかけるだけだ。どんな生活が我らの生活と肩を並べられよう。ただひたすら真っすぐに育つものが善の模範となる我らの生活と。我らはいかなる希望とて持たぬが、しかしそいと希望の回りを回り、回ることでやがて希望を手に入れる。長い間唯一の卓越した獲物を追いか<sup>(54)</sup>け、今になってやっと獲物は絶対に捕まらぬことを悟るような者共とは全く違う。むしろ、獲物が何かの時に追跡者の近くに留まろうと、それは追跡者を待ち望んでそうしているのではなく、たださらに遠くへ逃げようと一呼吸入れているだけなのだ<sup>(55)</sup>と合点の行く人々なのだ<sup>(55)</sup>。それゆえに、我らの生活が他のいかなる生活にも遥かに勝って優れていることを疑う者には、同じく疑わせよ、当然の功があり実直なテリオンが怠け者のエスピロスに一步を譲り後れを取ると。だがそれは、雌鹿が羊より駆けっこが遅いとか、雄鹿が山羊よりその雄姿に劣るとか、詭弁を弄するのと同じこと。

ロンバス教師 サテ、サテ、ソレハマサシク提議サレタ疑問ニツイテ、コウ言ウノト同ジコト<sup>(56)</sup>。即ち、大いに役には立つが大いに欠点の多いテリオンか、あるいはさほど役には立たないが欠点のないエスピロスか、何れが良しとされ、受けいれられ、承諾されるか。

五月祭の佳人 だめ、だめ、あなたがたの月並みな頭では、この重大な問題は扱えません。その馨しい精神がより大きな困難をくぐり抜けて来られた御方様に、わたくしはすでに解決をお任せ致しました。あなたがたの石頭にあの御方様の邪魔をしてほしくはございません。だから、おお、御麗人様、貴女様のあらゆる欲求は貴女様にしごく当たり前の事ゆえに、貴女様の欲求の成就を見る

うか。お前たちの中には忠義こそあれ、妬みなどかけらもないのだから。そこでは、人は望めば善人になるのが理に適い、善の道から退くべきいかなる表向きの根拠とてない。そこでは、眼は自然の摂理を熟視することに忙しく、心はそれを正直に利用することを黙して喜ぶではないか。学識ある人々が言うように、黙思こそが最高の事柄であるとすれば、激越な圧迫にも卑屈な阿諛追従にも屈さない今の羊飼いの生活ほど、沈思黙考する人<sup>(47)</sup>にとって相応しい生活があるろうか。

どれほどの数の宮人たちが灌木の中、野に隠れて悲しげな苦情を漏らしたとか。ある者は、彼の眼を暗ませ、それでいて彼の心を燃え上がらせる憧れの女性の身分の高さを嘆く。ある者は、愛する女性のこの上ない美しさがこの上ない残酷さと交じり合っていると嘆く。またある者は、愛の労苦を愚行と見なす女性の有り余る才覚を嘆くのだ。おお、一人の女性の名前が多くの宮人たちの口の端に上り、われらの谷間を彼らの陰鬱な苦悶の証人とするのを<sup>(48)</sup>、何としばしば耳にしたことだろう。そのようにして、長く恋に苦労し辛酸をなめたのち、その思いが絶望のほかにはどんな羊毛も生み出さない<sup>(49)</sup>のが分かると、彼らは若い宮人から老いた羊飼いになったのだ。

さて、甘やかな小羊たち、お前たちのことで始めた話ゆえに、お前たちのことで話を終えよう。かくも無邪気なものたちを糾弾するために口を開くような奴は、卑劣な狐と同じく憎悪されるがよい。かびたチーズよりも食えない奴になるがよい。その声は狼の遠吠えよりも不快で、その外見は米がゆの中のヒキガエルよりも忌まわしいものとなるがよい。

リクソス おぬしの生活には、なるほどいくらかはいいところがあるようだ。

ロンバス教師 おお、オ默リアレ、オ默リアレ、さもないと、滋養に富む脂肪分が燃やされることになる、つまりとんだへまをやらかすことになりますぞ。先ずは私に物事の髓入りの骨、すなわちまさしく核心部分を明晰にさせていただきます。この者は、あたかも子羊たちと協議会を催しでもしたがごとく、ある種の修辭的言辭を弄して要点へ切り込んでおりますが、しかし実は、リクソスの旦那、その間、彼はあなたに馬乗りになっている、つまりまごまごとたぶらかそうとしているのです。なぜと申すに、この者は羊は善良だ、ソレユエニ羊飼いは善良だと言っている、つまりは、人差し指と親指とが近いのと同じく、互イニ近イモノカラ導キ出サレル演繹法<sup>(50)</sup>という訳ですな。しかしてまた、この者が言うには、満ち足りて暮らす者は同様に善良だ、羊飼たちは満ち足りた暮らしをしている、ソレユエニ彼らは善良だと。つまりは、結婚で結ばれた者

ドルカス お前さんが好きな方を選んでくれて、はらわたがすっきりしたぜ。わしの取り分については、残り物をお前さんの相棒にくれてやら。

リクソス 恥ずかしくないのかい、老いばれ抜け作さん、一介の羊飼エスピロスを、高貴な職業、狩人のテリオンと比べるなんぞ。その眼で残酷な罰を与えることができるそのような御方の面前で。

ドルカス 口をつつしめ、わしはその御方にもその御方の眼にもお節介はやかない。町で言われていることに、二つながらに危険なものだ。わしはテリオンと可愛いエスピロスを比べてみたりはせぬ。テリオンはこそ泥、エスピロスは乳離れしたばかりの子羊みたいにおとなしいからな。

ロンバス教師 アア、悲シイカナ、嘆カワシイカナ、凡ナル人々ノ無知ト愚カシサハ<sup>(44)</sup>。野蛮で下らない者どもめ、私トイウ小サキ人<sup>(45)</sup>と長らく付き合いながら、それでいて、なぜに議論の構築の仕方も分からぬのか。耳の穴をかつぽじって、よく澄ましてみよ、着想の子を孕んだ私が直々に、鉛のごとく重く鈍いお前たちの脳髓に手ほどきをしてやるからに。先ずは論点を細別しなければならぬ、あたかも一個のチーズを二つに切り分けるがごとくに。私はこうしてそなたらの愚鈍な意欲に私の言葉を噛み合わせねばならぬ。なぜなら、談話ハ第一ニ細分サレ、第二ニ標題ガ整理サレネバナランカラナ、タトエバジャ<sup>(46)</sup>。テリオンがこの乙女、デイム・マイアの妖精を征服せねばならぬのか、あるいはエスピロスが乙女を屈服させねばならぬのか。第二ノ問題トシテハ、彼ら二人の真価だが、それは更に三種類に均等に分類されねばならぬ、あるいは彼らの歌の浸透性、あるいは彼らの仕事の卓越性、あるいは彼らの取り柄の優越性に応じて。歌の腕前については、言ヲマタヌ。イマハ先ず彼らの身分の定義について議論を進め、それからどちらがより内的に、すなわちより深く値するかを問わねばならぬ。

ドルカス ああ、哀れドルカス、ドルカス哀れ、子供のときに学校に行かなかったばかりに、ロンバス先生の謎めいた演説の意味がまるっきし分からないとは。だけれど、わしの頭でも、これだけのことは何とか分かるぞ、わしの真心からして羊飼たちのためを思っで見つけてやれることを、腹の底から諦めねばならぬということは。おお、甘やかな蜜のごとき乳色の小羊たちよ、お前たちのように汚れなきものたちを預かって世話をする人々の悪口を言うために、あちこちとそのネタを捜し回るそんな非情な石のごとき心の持ち主がどこにいよ

貧しからず 自由を蓄える者  
きみにのみ縛られ きみよりほか富を求めず  
この獣を捕まえよ<sup>(35)</sup> 他の獣が怖くて捕まえられぬなら  
これこそ獣の中の 最高の獣なれば

エスピロスが女王様に跪いて、

エスピロス 御裁決を。いずれの者に美の力が与えられんか。

テリオン 愛について御裁決を。いずれの者に愛が傾けられんか。

しかしながら、二人が女王陛下の裁決を待っていたとき、羊飼たらしと狩人たらしは大層な剣幕で言い争いになった。それは彼らのどちらがより巧く歌えたか、それゆえに、どちらの身分がそれだけ尊敬に値するかという問題であった<sup>(36)</sup>。それぞれの陣営を代表する弁者は、老羊飼ドルカス<sup>(37)</sup>と若い狩人リクソス<sup>(38)</sup>で、二人の仲裁者として教師ロンバスが中に入った。

老羊飼ドルカス わしの老祖母のすべての祝福が、幼気ないエスピロスよ、蜜のごとく甘きそなたの歌声ゆえにそなたの両肩に降り注ぎますように。わしの正直さにかけて、町の鐘という鐘を鳴らしても<sup>(39)</sup>、そなたの歌声には及ばなかったであろう。あのあばずれ女の高慢な心がそなたに屈服しないならば、羊の肝蛭病<sup>(40)</sup>に襲われるがいい。美しい女は自らの麗しさを錆び付かせるために備えているのではないと教えてやるために。

狩人リクソス おお、ミダス王よ<sup>(41)</sup>、なぜにあなたはこの薄ら馬鹿の繰り言に生きてその耳をお傾けにならぬのだ。狩人の大切な獲物の骨にかけて<sup>(42)</sup>、あいつには子牛の鳴声<sup>(43)</sup>と夜鳴鶯の歌声との区別がつかぬ。だが、向こうにいられるご立派な気高いご婦人が美しいのみならず思慮に富むならば、テリオンよ、そなたこそ褒美に与かろうぞ。そして、ドルカス爺様、お前さんは、若旦那のエスピロス共々、今と同様、不甲斐ない愚物のままだぞ。

ドルカス ご挨拶だな、リクソスさんよ、あんたのご意向は頓馬な阿呆になることかい。

リクソス 羊みてえなおどおどした間抜けよりはいいってことよ。



テリオン さあ エスピロス お前の腕前を披露する時だ  
これほど艶やかな方に お前がどれほど相応しいか示せ  
お前の知性を火照らせよ あの娘の気持を勝ち取るつもりなら  
冷たい水は 恋の炎を決して約束しなかったから  
偉大なるかな われらが希望を繋いでいる御方は  
更に偉大なるかな 裁決を下さるに違いない御方は

そこでエスピロスは、あたかも天のミューズ神<sup>(32)</sup>の靈感と授けられたごとく、直ちに  
歌い始めた。仲間の羊飼たらは歌声に合わせてレコーダーで伴奏を付けた。筒  
形の袋に入れて持参して来たのである。テリオンの側も負けじと、持りの角笛のよう  
に肩帯で首に掛けたコルネットを吹いて対抗する。

エスピロス 調律せよ わが歌声よ 私が生み出す高い調べを  
高き着想へと 歌は是非とも上らねばならぬ  
星星より高く 石のごとき野原より固く  
生きるか死ぬるかの ひたむきなるわが思い  
甘やかなる御方 私は誓ってその奴隷  
野生の森にかくもすばらしき宝を 持たせてはならぬ

テリオン 最高の調べは しばしば最低の心から生まれる  
さながら浅き小川が 最大の音を立てるがごとし<sup>(33)</sup>  
生か死を見極めるためなら 他の思いを探せ  
お前の星は落ち 石の大地は耕された  
優しき御方 羊に仕える惨めな奴に  
かくも大切な宝を 羊の群れに交じって持たせてはならぬ

エスピロス おいらの二千頭の羊は ミルクのように真っ白  
だが きみの愛らしい顔は もっと白い  
牧場は豊か 羊毛は絹の柔らかさ  
全部がきみのもの きみの好意を所有させてくれるなら  
いつも気をつけて 身を任さぬように  
富を持たず 知性に欠ける奴には

テリオン おいらの二千頭の鹿は 野生の森の中  
鹿は捕れるが きみは捕まらぬ<sup>(34)</sup>

に捧げようと骨折ってられるからでもごさいません。それとこれとは別のこと。御殿様はわれらが隣人、ここら一帯はわれらが所有の森の中。さらにまた、貴女様の偉大なるご身分ゆえでもごさいません。いかなる身分も皐月一杯を支配する女王とは比べるべくもなく、その女王がこのわたくしなのですから。今この時この場所がわたくしの従者でありますゆえに、わたくしを貴女様に屈服させる何かを貴女様の温顔に見出さなければ、逆に貴女様からの敬意を求めようとするとところだと思し召してください。しかるに実を申して、貴女様はわたくしが最も卓越したいと願います一点、つまり美しさにおいて、わたくしに勝っておられます。それがため、こうして臣従の礼をとり、これらの森がかつてお迎えした中で最高に凛々しき貴婦人様として大きな贅辞を呈する次第です。

ところで、早速ですが、老羊飼ラロスの導きのままに、わたくしのいま置かれた境遇をお話し致します。ひとえに貴女様にわたくしの苦境の審判者、そして他の二人の者の価値を定める審判者になっていただきたいがため。かくして白晳の乙女であるわたくしは（さもなければ、たぶらかされていることになりますが）、それゆえに、村の皆の衆が諸手を挙げてこの楽しい五月の完全無欠の女王に選ばれました。そのわたくしに（口にするのも恥ずかしいことながら）二人の若者が、一人は狩人テリオン<sup>(27)</sup>、いま一人は羊飼エスピロス<sup>(28)</sup>、実を申しますと、長いこと思いを寄せておりました。わたくしは二人とも好きですが、二人とも愛しているとは参りません。エスピロスは財力豊かで、テリオンは活力が漲っています。テリオンはここら辺りの森から鹿肉をくすねて来たり、それと同じようなたくさんのすてきなことをして尽くしてくれます。そのようにわたくしにたくさんの楽しいことをしてくれます。でも、時には怒りっぽくて、わたくしを殴ったり、侮ったりします。一方、エスピロスは、羊飼ですので、目を見張るような大した奉仕はできませんが、気立ては穏やかで、ただの一度もひどいことをしたことはありません。羊たちにえさを食ませ、甘やかな灌木の下に佇み、時には、人づてによれば、物悲しい歌にわたくしの名を織り込んで歌うとか<sup>(29)</sup>。

そこで、美しい御麗人様、貴女様にお尋ねしたいのです<sup>(30)</sup>。テリオンのように長所も欠点も多く持ち合わせている人を選ぶべきでしょうか、それとも、エスピロスのように長所は数少ないが全く欠点のない人を選ぶべきでしょうか。貴女様の御裁決を仰ぐ前に（卓越せる御麗人様）、各々が鄙びた歌にしてどのように自らの取り柄をひけらかすのか、お聞き及び下さいませ。

直ちに、テリオンは歌競べ<sup>(31)</sup>とエスピロスに挑戦し、次のごとく初めの六行と歌った。

てもらえませんでした。私は、まさしく私であるところの者である。私ハ申シマシタ、賢者ニハ一言デ十分<sup>(18)</sup>、と。トロイアの落ち武者アエネーアス<sup>(19)</sup>が、畝を作って打ち寄せる砂運ぶ海原に逗留中に、口から出た言葉は、イツノ日カコレラノ辛キ事ドモヲ思イ出スタニ喜ビニ包マレン<sup>(20)</sup>。さて、さて、前言ニ戻ラネバ<sup>(21)</sup>。純粹な真実は、とある疑イナク美シキ乙女<sup>(22)</sup>、この土地に住む人々の満場一致にて至上の佳人、デйм・マイア<sup>(23)</sup>の月の麗人として選ばれ指名されし美人が、二人の、番いの、一對の、一組<sup>(24)</sup>の若者たち、あの狡猾な臆病者のキューピッドに恐るべき、痛ましき、決るような、偉そうな矢を打ち込まれし若者たちに、尻を追いかけ回され、世間の言い方では、アルヤリ方デ、狩猟されて来た、ということです。

ここで五月祭の佳人が刺って入り、ロンバスに向かって言うには、

五月祭の佳人 消えておしまい、持って回った退屈なお馬鹿さん。あなたの眼はあちらの女王然とした御方の御姿を眺める価値はなく、ましてや、あなたの愚かしい舌があ御方の思慮に富む耳を煩わすことは以っての外。

これを聴いて、ロンバス教師は腹立ち紛れに叫んだ。

ロンバス教師 オオ、何ト情ケナイ世ノ中カ、オオ、何トイウ風潮カ！<sup>(25)</sup>職業は子供、地位は女、年齢は淑女、シカモナオ乙女である者が、私の学識の評判に愚か者の上書きで泥を塗るとは。オオ、何ト情ケナイ世ノ中カ、オオ、何トイウ風潮カ！

ここで再び五月祭の佳人がロンバスに言うには、

五月祭の佳人 お下がりなさい、ラテン語馬鹿さん。今しか見られぬ唯一の御姿で存分に我が眼を養いたいという待ちに待った望みを叶えさせてください。

哀れな教師は後ろへと下がり、佳人は跪いて次のごとく申し述べる。

五月祭の佳人 お考えになつてはなりませぬ、甘美にして華美な御麗人様、わたくしがこのように貴女様に遜っていますその訳が、貴女様のきらびやかな装いゆえであるとは。なぜなら、自然の花の美しさほど神々しく艶やかなものがありましようか。また、さる御殿様<sup>(26)</sup>がお屋敷にて出来る限りの栄誉を貴女様

礼に、無学な痛打をいたま受けた。女王がその場にお見えになり、彼らの目に入ると、その身分は定かならねど、何かしら威厳があつて、彼らは驚嘆のあまり脇に避けじっと目を凝らす。やがて老羊飼ラロス<sup>(9)</sup>（實力ある羊飼の一人）が一步前に出て、一、二度お辞儀をして次のように言った。

老羊飼ラロス　どうか仁慈を以て、私の口、舌、齒が開いて貴女様にお伝え申す一事に溢れんばかりの知性を少しお傾け賜わんことを。実を申せば、陛下、こういうことなのです。私ども羊飼が〈女〉と呼び習わしておりますとある〈雌の生き物〉、勿体振った気障な面貌ではあるが、私の真っ白な子羊にかけて、貴女様と比べれば四分の三ほどの美しさ。その〈女〉とやらが私らの仲間内で一番見映えよい<sup>(10)</sup> 二人の若者の脳みそをすっからかんにしてしまいました。どのようにしてだか、お分かりですか。私の母御キット<sup>(11)</sup>の魂にかけて、〈恋〉とかいうとんでもない<sup>(12)</sup> 病氣にかからせて。私が若いころは、〈恋〉なんぞは愚行だときっぱり言われたもんです。

ところで、あちらに控えていますのは、實力ある学校教師。当の問題の全容をよりよくご披瀝できる者です。とは申せ、実にけしからんことに、この者の弁舌流露<sup>(13)</sup>にかかわらず、若い奴らは彼の学識に何ら敬意を払いませんでしたが。さあ、さあ、ロンバス先生、そんなに畏まって赤くならないで<sup>(14)</sup>。最高に麗しき方は最高に優しき方と言うではないか。事件の全貌を申し上げるのだ、私などよりおまえさんの方が事細かくずっと巧みに説明できるのだから。

その時、ロンバス教師が前に進み出で、このほか優雅に振る舞って、次のごとく学識ある演説<sup>(15)</sup>とぶった。

ロンバス教師　雷電操るジョーブ神が貴女様の卓絶せる美しさに数々の稀なる贈物を降り注ぎ賜わんことを<sup>(16)</sup>。貴女様の美しさはきらめき渡る光にてこの土地の野生の動物たちの露な敵意を忘れさせます。かく申す私めは、力ある御麗人様、学校教師、すなわち教育者、若き人々の躰に少なからず精通している者で御座います。躰の点におきましては（全く以て褒むべきかな）、私は優しさにも欠けず厳しさにも欠けない言わば幾何学的均整を用います。なぜなら、このような言葉があるからです。征服サレシ者ヲ容赦シ、奢レル者ヲ挫クベシ<sup>(17)</sup>。

しかるに、私の容姿端麗な徳を以てしても、これら下賤の者どもの惡に汚れた手から私を庇いきれません。私が、共の者モナク、こいつらの血ニ飢エタル諍いを止めに入ると、あたかも愚かな驢馬を扱うがごとく、一片の敬意をも払っ

を妻とするのにふさわしくあらんと励み競っています。今ではとうとう（嫉妬心とは、やれやれ、忌まわしいもの）恋敵どもはそれぞれ支持者たち<sup>(5)</sup>を引き連れて、激しく言い争い、今の今にも血の雨が降りかねない有りさま、もしも御淑女様のお咎めがなければですが。板挟みになった娘が哀れでなりません。さあ、お優しい女王様、お助けを。この道をそのままお進みになれば、皆が寄ってたかって娘を苦しめている現場に行き着かれます。わたくしはもはや御前には止まれません。この土地の者たちが言うには、女王様の御眼差しには危険が潜むからです<sup>(6)</sup>。

こう言うと、婦人は嘆願書と女王陛下に託し早足に離れた。嘆願書には非常に畏まって次のごとく認めてあった。

### 嘆 願 書<sup>(7)</sup>

#### 至高の優渥なる女王陛下様に一筆奉る

地位 衆に優り  
温顔 勇ましき<sup>もののふ</sup>武士を魅惑し  
心映え 賢き心を顔色なからしめ  
様々なる天賦の才を一身に体得せるお方様  
惨めな私めは苦悶をいかにして休ませましょう  
耳は焼かれ、目は眩み、心は押しひしがれている所に  
地位は偉大、偉大さは我らの楯  
温顔は時に曇るが、常に喜びを与え  
心映え聡く、叡知ゆえの温和さ  
かような天賦の才、乞食の眼さえ飾り立てる  
ならば惨めなこの私、羞じらう恐れを抑え  
我が耳、我が眼、我が心をあなたにて養わん

これをもって、女性嘆願者がいなくなると、森の中で混乱した物音が聞こえる。直ちに、六人の羊飼いと、それと同数の狩人たちが入って来る。彼らは〈五月祭の佳人〉と己の側へ引っ張り寄せようとするが、彼女はどららにも靡く気がないらしい。一同の中にロンバス教師<sup>(8)</sup>がいた。近隣の村の学校教師で、自らの学識ある知恵と得心し、権威を以て双方の諍いを分けようとするにやっていた。しかしその返

# フィリップ・シドニー『五月祭の佳人』

— 翻訳・注解・解説 —

村 里 好 俊

【翻 訳】

## 『五月祭の佳人』

卓絶せる女王陛下、ウォンステッド庭園<sup>(1)</sup>とご散策中、木蔭なす小さな森に入り込れた折、供回りの中に突然現れたのは、土着の正直な男の妻らしき身なりの婦人<sup>(2)</sup>。正義のお裁きをと声を張り上げ、居並ぶ貴顕紳士に執り成しの有り難いお言葉をと所望するので<sup>(3)</sup>、女王陛下の御前に引き出されると、直ぐさま七重の膝を八重に折り、次のごとく嘆願の言葉を繰り出した。

嘆願者 この上なく麗しき御淑女様。これ以外の貴女様の威厳ある御称号につきましては、お偉い方々が縷々お与え下さるでしょうから、わたくしの目がその証人となる厳然たる事実のみを申し上げます。貴女様に最高の至福が訪れますよう願う気持ちは人後に落ちない、この哀れなわたくしの、悲惨極まるこのわたくしの、哀願を今この場でお聞き届け下さいますように。わたくしには一粒種の大切な娘がございます。娘はわたくしの期待を一身に背負っておりますが、産みの苦しみも、子育ての苦労も補ってあまりあるほどの美しい顔とけなげな心根に恵まれ、ほっと安堵しておりましたのもつかの間、安堵の豊作を収穫すべき時にやっと到達したいま、この土地で〈婚礼〉と申しております<sup>(4)</sup>、重大な事柄に心を煩わされ、娘が正気を失うことになりはしないか、少なくとも純潔を奪われはしないかと気掛かりでなりませぬ。他の女たちは主人と名のつく者は亭主一人でたくさん、一人でも持てあまして煩わしいのにと不満がりますが、可哀想な娘は二人の男にひどく付きまとわれて悩んでいるのでございます。二人とも娘にぞっこんで、二人とも同じ程度に娘に好かれ、二人とも娘